

## ゲーテと教育——素描

多田鉄雄

はしがき

編集委員の御厚意から本誌に何か書く機会を与えられて、まず念頭に浮んだのは、やはりゲーテであった。中学に入って一年も経った頃であつたらうか、「滝口入道」によって異性への憧憬を目醒まされた筆者は、たしか三年の時と思う、「若きウェルテルの悲しみ」を感激の裡に読み通してからは、身近かにロッテを見出した思いをあげくれに懐くようになっていた。小宮先生とともに、筆者の大学時代の恩師の一人である阿部次郎先生はゲーテ研究者としても有数な学者であつたが、彼はゲーテ死後百年祭の年、昭和七年に「ゲーテへの感謝」と言う一文を草している。<sup>(1)</sup>これはあるいはドイツの学芸雑誌「ノイエ・ルントシャウ Neue Rundschau」の同年三月号に、ヘッセ Hermann Hesse と、ジイド André Gide の兩人が、ゲーテに謝意を捧げている文章があるのに刺激されたことであろうが、その中で阿部次郎は、ヘッセが詩人ゲーテ、文士ゲーテに対して初めは反撥を感じていたが、のちに、も一人のゲーテ、すなわち賢者ゲーテを見出し、そのことをヘッセが「賢者ゲーテ der Weise, Goethe はいつでも存在していた。彼はただしばしば長く隠れていたにすぎなかつた。彼は超時間

的である。何となればあらゆる知慧 Weisheit は超時間的であるから。彼は超個人的である。何となればあらゆる知慧は個人を超克するから。「おおよそ賢者となつて時間性と個人性との桎梏を脱ぎ捨てた人を見るより優れた見物はない。」と書いているのを引合ひに出して、阿部自身はもっと子供らしく素直に、「自分の最も愛読する詩人の名を列挙するとき、最少の抵抗を以て享樂するものとして最初にゲーテをあげずにいられない。」と述べている。<sup>(2)</sup>

凡人の筆者をこれらの人々のレベルへ持ち上げて考えようなどという気は毛頭ないが、ドイツ語履修クラスにいた中学四年のとき、ゲーテの「詩と真実」抜萃を教科書で読むにいたつて、ゲーテへの関心はますます深まるのであった。進学のための受験勉強という枷かぎに夢多い青春を縛られて過なごしていた自分には、少年ゲーテが、その家柄、父親の方針などから、やはり自分を制限されているように感じた心境が身にしみて同感されたのである。彼の自叙伝「詩と真実」は次のように述べている。

「家の裏手の側からは、殊に二、三階からは、町の城壁のところまで拡がっていて、殆んど見通しもつかないほどの広大な隣人の庭園を快適に展望することが出来た。」この三階の「部屋が私の一番好きな、私が成長するにつれて、悲しい、いやあこがれを誘うような居場所であった。」「この部屋で私は夏にはいつも課業を勉強していて、雷雨の来るのを待ちうけたり、丁度、西に向いている窓から沈み行く夕日を飽かず眺めつづけたものであった。その一方、隣家の人たちが散歩したり、草花の世話をしているのや、子供たちが遊びたわむれているのや、集まった人々が楽しげに談笑しているのやらを、うらやましく眺めていたり、九柱戯遊びの球に当って立てた柱が倒れる音を聞いたたりして、私の胸中には早くから、淋しさの感情と、それから生まれる憧憬の念とが

湧き起るのであった。<sup>(3)</sup>

さらに中学終りのときはウィルヘルム・マイスターの中からの抜萃「ミニオン Mignon」が教科書になって、その中の堅琴弾きの歌や、「君を知るや南の国」などが、そのころ生田春月によって翻訳され広く読まれていて筆者も愛誦していた、ハイネ Heinrich Heine の詩とは違った世界を眼の前に展開してくれたのであった。

大学に入って、さてゲーテを手掛けて見ると、その基礎研究だけでも、その内容、奥行、量から言って手に負えるものでないことがすぐにわかって、ともかくも「若きゲーテ」<sup>(4)</sup>を研究テーマにして、ゲーテ初期の作品「恋人たちの気まぐれ」「ともに罪あり」などを通じて青年ゲーテの心境の一端を探るのに精一杯であった。

その後、人間研究、児童心理、教育とその方面を辿って来て現在にいたったのである。これまでの長い学究生活、個人生活の中で、ずっとゲーテから離れていたのであるが、何かあるとゲーテを引合いに出して来て、そのたびに何かしら教えられて来たのであり、筆者の生涯のテーマは、これを大袈裟に言えば、学問的にも実践的にも「人間と教育」とでもいうことになるが、なんといつてもゲーテは筆者に結局は無くてはならない対象であった。今ここに一つの区切りの点に立って、ものする本稿にゲーテを取上げた所以である。

ひるがえって現在の時点で、筆者にとって日常もつとも気にかかっている一つは、人間尊重と協同が不可欠の要素であるデモクラシーが、デモクラシー国家たるべきわが国でどのようになっているかということである。その説明はあえていうを要しない。ゲーテの教育観の中の「畏敬」「個人と協同体」を考えて、本稿を「ゲーテと教育」とした所以である。

もとより世界には——と言ってもさしあたりドイツとわが国を考えるのだが——ゲーテについては無数の研

究、数多くのすぐれた研究があり、本稿の如きは蛇足としても取り上げるに足りぬものであろう。それゆえ最少数不可欠のものを除いて、これらの研究に追隨する無駄を避けた。ただ筆者の知る限りにおいて、これまであまり触れられていなかったと思惟されることが、一つだけでもとりあげられていることが出来ていれば、望外のしあわせである。この点から本稿を「素描」とする所以である。

(1) 阿部次郎「ゲーテへの感謝」(阿部次郎全集、第十卷)三二七頁以下。

(2) 前掲書、三二二頁以下。

(3) Goethes Werke, Hamburger Ausgabe, (以下、単にH.A.) Band 9, Dichtung und Wahrheit, Teil 1, Buch 1, S. 13.

(4) ゲーテ研究においては、ワイマール時代以前、いわば彼のロマンティック時代を、それ以後、思想の上からも、作品の上からもクラシックに發展して行ったのに対比させて「若きゲーテ der junge Goethe」して独自の意義を持たせている。例えば、

R. Weisgenfels: Der junge Goethe, 1897.

K. Vitor: Der junge Goethe, 1930.

E. Wolff: Der junge Goethe, 1907.

小口優「グンドルフ、若きゲーテ」昭和一七年(原著 Friedrich Gundolf: Goethe の序と青年時代までの訳)

木村謹治「若きゲーテ・素描」(木村「ゲーテ」昭和一六年)

木村謹治「若きゲーテ研究」昭和一二年

大畑末吉「若きゲーテの社会観」(上原専祿編「社会と文化の諸相」昭和二八年)

(5) 筆者がやはり、大学で教えを受けたドイツ文学文献学者の奥津彦重先生は、昭和一〇年に刊行されたその著に「最近の」と但し書きを付してドイツにおけるゲーテ文献の表を作り載せているが、そこでも、二百に近い年報、論集、雑誌記念号、註釈を持ったゲーテ著作集・書簡・日記・対話などもその一冊を一種類と見て、その種類は千を超える。  
(奥津彦重「ゲーテ序論」昭和一〇年、ゲーテ文献、巻尾一―九七頁)

## 1

「ファウスト」を初め、「若きウェルテルの悲しみ」「親和力」「ウィルヘルム・マイスター」の作者、数多くの素晴らしい詩を唱いあげた詩人、「色彩論」「植物の変態」で知られる自然科学者、ワイマール公国の政治家・ゲーテ Wolfgang von Goethe は一七四九年八月二十八日にフランクフルト Frankfurt a. M. に生れ、一八三二年三月二日にワイマール Weimar の自宅において義娘オットィリー Otilie をベットのなかから呼んで「二番目のよろい戸も開けてくれ。もっと光が入るように! Mehr Licht!」と命じたあと、間も無く息を引取った。彼女は少しあとになってその死に気付いたと言われている。

ゲーテが不世出の世界的天才で、上に述べたように、あらゆる方面でその才能を發揮したことは、まさに稀に見る天性の賜物によるのはいうまでもないことであるが、かかる天才が生れるについては、それだけの因由があり、そのような天才があのように成長し、発展して行ったについては、その時代、その環境が、あづかって力あったというべきであろう。ゲーテ自身が

私は

父から、この体格と

堅実真面目な人生をおくることを、

母から、快活な性質 'Froh natur'

を、  
「はなし 嘲を楽しむ心を、

受けついで。<sup>(1)</sup>

と唱っているように、ゲーテの父は几帳面な努力家で「凡てのことを、口では言いつくせぬほどの勤勉と堅忍と反覆によってのみ獲得した<sup>(2)</sup>」のであり、あらゆる世の父親のように彼も又「自分自身に欠けていたことを、息子において実現しようとする、罪のない念願<sup>(3)</sup>」を持っていて、自分の「最初の経験を」息子のところで役立たせようと考へる人であった。

これに対してゲーテの母は「いつもほがらかで、快活で、他人もそうあるようにしたい<sup>(4)</sup>」性質であり、夫より二十才近くも若かったので、むしろ心情的には息子のゲーテの方が近く、ゲーテを深い愛情でつつんでいた。

またゲーテの父は、その祖先は職人階級の出で、父の祖父は蹄鉄工、父の父は仕立屋で、営々と働き、ゲーテの父を大学へまで進ませたという代々が勤勉一途の一家であった。これに反しゲーテの母は学者・法律家を代々の祖先に持つ名門の出であった。それにも拘らず、彼女は上流階級の虚栄心や傲慢とは無縁で、きわめて市民的な快活な女性であった。「彼女はただ自然的であったばかりでない。彼女自身が自然であった」とブランドスが

言っている通りであり、かくて父から勤勉、努力、母からは豊かな感情、快活、想像力といったものを受けつぎ、このような素質がいわばゲーテという天才を完成させたと見ることが出来、この点からもゲーテは真に幸運児の星を持って生れたといえる。ディルタイはこのことを「自然はゲーテに対し、美しさと、強い生活力と、創造的天才性と、そう言ったあらゆる恩恵を一杯にふるまい与えた」と評している。<sup>6)</sup>

さらにゲーテが成長して行った時代は、ディルタイもいうように、ドイツにおいては経済生活、市民間の交際における法律的安全性、また宗教の自由がどんどん高められて行ったときに当たっていた。それまでの家庭生活、社会組織の固い拘束が次第に弛められて来て、個性がより自由な活動の場を占めるようになっていた。<sup>7)</sup> いわば文学上の疾風と怒濤時代 Sturm und Drang の土台が準備された時代であった。また環境からしても、ゲーテの育ったライン川上流およびメイン川のほとりの地方は、自己の個性を、喜んで感じ、他人の個性にも同様であらしめ、その日その時の楽しみを享受して暮すのが特徴であったが、<sup>8)</sup> 彼はこのような中で、そして上に述べたような家庭環境のもとで自分を形成して行ったのである。

ここでゲーテの世界観<sup>9)</sup>を詳述することは出来ないが、一言にしていうならばキリスト教的汎神論に立ち、宇宙・自然と神・神性の統一を信ずる。<sup>10)</sup> 宇宙は生成と言う行為 Tat それ自体で、それが神の理法である。個人精神も自然的客観性も広い意味で自然である。それゆえ

眼が太陽の性<sup>まが</sup>を持たなかったら、

太陽をどうして見ることが出来るよう！

神からの固有の力がわたしたちの心の内で生きていかなかったら  
どうして神のものがわたしたちを歓喜させることが出来よう。<sup>10)</sup>

わたしたちは同一のものによってのみ、同一のものを認識し、周囲にある自然の諸要素さえも、わたしたち自らの内にあるから認識するのであるという古代のエムペドクレス Empedokles の叡智を詩にしたのがこれである。<sup>11)</sup>

すなわちどんな理解作用 Begreifen も、理解される対象と同一本質であることによってのみ可能であるというモテーフが、ゲーテの全生涯を貫いていたのである。

ゲーテを理解する鍵となる基本的なものを一、二あげれば、まづ第一に彼の生活の根本態度であるところの「いわゆる機会詩 Gelegenheitsdichtung」的傾向である。彼自身の言葉から始めよう。詩と真実の中で言う。<sup>12)</sup>  
「かくて私が一生涯離れることの出来なかつたあの傾向が始まったのである。すなわち、私を喜ばせ、あるいは苦しめ、あるいはそのほか私の心に作用したものを、一つの形象、一つの詩に化してしまい、かくすることによって、そのことに対する心の締めくくりをつける、その結果、外部の事物に対する私の観念を是正すると同時に、私の心を落ちつかせるという傾向が始まったのである。生れつきたえず極端から極端へ走る私には、このような天分は誰よりも必要であった。それゆえ私によって表現された凡てのことは、大きな告白 Konfession の断片にすぎない。」

右の言葉のうちには諦念、対極性、高昇、といったゲーテの世界観に特有の観念が暗示されている。<sup>13)</sup>



それは別にして、このように自己の個人的体験の内容をあますところなく表出することが、ゲーテのもっとも固有な天分であった。機会詩とは、その言葉のように、たとえば何かの祝いの機会などに、それに照応して作られる詩のことであり、ゲーテ自身の詩にも「機会詩 *Gelegenheitsgedicht*」<sup>65</sup>として一括されているものが在るが、ゲーテがしばしば言っているように、彼にとってはもっと広い意味で、あらゆる経験が機縁になって彼の詩が、作品が生れるというのである。したがって人間に変化があり、発展があり、その「觀念が是正される」ことがあっても、すべての彼の表現は、その時その時の彼自身の経験、彼自身の真実を物語るものであった。このことは彼の作品において、たとえば「親和力 *Die Wahlverwandtschaften*」の人物、エドアルトとシャルロッテがお互いに正反対のことを主張していても、そのいづれもが、ゲーテの心の中で共同体験され、そこで濾過されて出て来たものであるから、いづれもが、ある時、ある立場での、ゲーテ自身の主張と見るべきことを教えているといえる。

すなわちジムメルは、ゲーテの「統一性 *Einheit*」「全体性 *Ganzheit*」の理解、解釈についても同様であると<sup>66</sup>し、「ゲーテがいろいろの可能な立場を、次から次へと絶えず試みて行ったこと、変形して行ったこと、彼の長い生涯にわたり、あらゆる対立を味わい突き抜けて、発展して行ったことは、彼の統一性、全体性の解釈に数かぎりない仕方を許容している」とし、したがって「ゲーテの生涯の流動的統一性 *die fließende Einheit* は何らか一つの内容の論理的統一の内へ追込まれるべきものではない。」としている。

その第二はゲーテの他に比類ないと言っても過言でない強い想像力である。もとより、そこにはこの想像力を働かせる原動力となっている活発な精神活動が、——それは溢れ出るような感情であり、あるいは強靱な積極意

志でもあるが——、前提されるし、一方では鋭い感受性や直観 *Anschauung* の能力が想像活動の基礎を提供していることも当然である。

「想像力は一つの奇蹟として、人間の通常の心的活動とは全く異なる一現象として、わたしたちの前に現われる。しかしそれはある種の人間の持つ幾分か強い心的機構 *Organisation gewisser Menschen* にすぎない。ただそれが一定の基本的な事象のまれに見る強力さにもとづいているのであって、この事象から出発して、精神生活はその一般法則に従いながらも、普通の精神生活とは全くかけ離れた形 *Gestalt* に造り上げられて行くのである。」とディルタイがいうように、ゲーテはそこで全く固有の精神世界を形成して行ったのである。

人の心に入っていくこと、感情移入ということはかかる想像力によって初めて可能なことであり、高坂教授は「シェークスピアは、『百の心を持っていた』と言われます。つまり、百人の心のなかにはいって、百人の心を見わけることができたのですが、ちょうどそれとおなじように、種々さまざまの人の心のとびらをひらいて、その秘密にふれていくことが、ウイルヘルム・マイスターのひとつのねらいでもあるのです。」<sup>09</sup> といってそれを例証している。

作品解釈においてその精細な心理分析で鳴らした小宮豊隆も、ゲーテが「徒弟時代」の中でウイルヘルムにわたせたシェークスピアに対する誉め言葉が、そのままゲーテにも当てはまるとして「是ほど透明に人間を把握し、是ほど透明に人間を描き上げることが、正に驚ろくべきことである」としているが、まさに上記のことをより明確に形容しているものといえよう。<sup>20</sup>

ゲーテがみずから「他人の境遇に自分を置き、人間生活のそれぞれ特殊な在り方を共感し、喜んでそれに同情

するのが自分の天性である」としているが、これも豊かな感情移入によって初めて可能なことであろう。

要するに、ディルタイもいのように、ゲーテにあつては、その創作的活動においても、他の人の場合とくらべて、際立って明らかに想像力がその中心的位置を占めていたのであり、そして「ゲーテのこの詩的想像力と啓蒙主義との、いな当時のかかる学問精神との闘争は文芸の歴史における比べるものない見物で」あつたし、逆にいえば、ゲーテが「啓蒙主義を学問的に克服したからこそ、はじめて彼の詩的世界に自由な進路を開くことが出来た」のである。

その三は彼の感受性 *Empfindlichkeit* である。その異常な鋭どさは、至るところで立証されるが、この感受性は直観と結びついて洞察力となり、空想と結びついて想像力となるものであるが、これまでのゲーテ研究においては感受性ということだけを取りあげては、あまり論ぜられていないようである。しかしゲーテの思想、世界観の形成の過程において感受性の鋭どさが多面に影響していることがうかがわれる。すなわち「詩と真実」の中からは、その例証を無数に拾いあげることが出来る。六才の時の経験、リスボンの地震の報道が与えた「聡明で、慈悲深いものとして彼に教えられていた神が、正しい者、不正な者をひとしく破滅におとしいれたこと」から受けたショックによる神への疑い、七才のとき、すなわち一七五六年に始まった七年戦争によって、それまで平和だった一家が、フランス派とプロシヤ派に分かれて対立し、かくて不和の暗い空気の中で過ごした七年の経験など、感受性の強い幼いゲーテの心がはつきりと描き出されている。

ゲーテはその鋭い感受性からきわめて近代的な、いわばシュニツラー的 Arthur Schnitzler な、フロイ德的な、深層心理学的な心理描写さえのぞかせている。一つは「親和力」の中にある。夫エドアルトは姪オットー

リエを愛していて妻シャルロッテを離婚して、妻が愛している大尉にゆづろうと考えている。しかも或る晩、忘れていたことを思い出したように妻の部屋に入って床をとともにするのであるが、その描写は

「ほの暗い明りの中で、心に思っている人への情愛が、その空想の力が、たちまち現実を打ち負かした。エドアルトの心はオッティリエを腕の中へ抱きしめていた、シャルロッテの方も、その心に遠く近くだよりのは大尉であった。かくて、きわめて奇妙であったが、そこに居ない者と居る者が一つになって、心をそそれ、喜びに燃えあがって、まざり合ったのである。」

これはメーテルリンク M. Maeterlinck の「モンナ・ヴァンナ」(一九〇二)とヘッベル F. Heibel の「ユーディット」(二八四〇)の女主人公の心理を想起させるものであるが、これらをはるかに凌駕して近代的である。また「徒弟時代」の中には、負傷して横たわっているウィルヘルムが、美女アマツオーネの掛けてくれた外套にくるまって、美女の身体を感じるくだりがある。

「温かな外套にくるまって静かに担架の上に横たわっていた。柔らかな毛から電熱のような温か味が、彼の身体の中へしみ込んで来る気がした。ほんとに彼はこの上もない、こころよい感触の中にいる自分を感じたのである。それは外套の美しい所有者が彼の上へ力強く作用したからであった。彼は外套が彼女の肩から滑り落ち、比べるものもないほど、気高い肢体が、後光に取り巻かれて自分の前に立っていたのを、今もまざまざと見た。」

これも見方によれば、大江健三郎の「性的人間」の一部の描写を想起させるものといえよう。

ゲーテの生涯は恋愛の一生であったといっても、大して過言ではないであろう。一四才でグレートヒェンとの

恋愛を経験してから、つきつきに恋愛し、七三才にして一八才の娘ウルリーケ Ulrike v. Levetzow を、その翌年求婚するほど愛し、そこで有名な「マリエンバートの悲歌 Marienbader Elegie」で次のように熱烈に

「明らかに、ものをとらえる心の力が萎えても、かの人を忘れるすべがなく、

心は かの人の面影を、十重二十重にくり返し描き出す。」

と、唱っているのである。彼の恋愛にも彼の鋭い感受性が大きく作用している。ここではそれを述べてゆく余裕を持たないが、ジムメルがゲーテの晩年の言葉「女性に関する私の理念は現実の現象から抽象されて出来たのではなく、その理由はわからないが、この理念は生れついた時からのものか、あるいは自分の心の中でおのづから育つて来たものである」を引用しながら、ゲーテは実際の心理学の意味の女性通 Kenner ではなく、それゆえゲーテが愛していたロッセ・ブッフの芸術的形像をたづねられたとき、「そんなこと考えても見なかった」と答えているのは、そうであるにはゲーテが余りにも彼女を愛していたのだと述べている。このことは「徒弟時代」の中でフィリーネに「私が貴君を愛しているからといって、それは貴君に関係ないことです」といわせていること、さらにジムメルがゲーテの恋愛は本人の全く純内在的的事件であることを詳論しているのと考え合せるとき、ゲーテの恋愛はその感受性と、そこから展開される想像力との所産であり、結局は彼自身だけの心情活動が中心であると解釈することが出来る。また青年時代の、本稿のはしがきで触れた初期の二つの作品はいづれも若い男女の嫉妬が描かれているものだが、そこにもゲーテの鋭い感受力がにじみ出ている。

ゲーテと教育——素描

もっともこのことは毫もゲーテが恋愛の中で耽溺していたことを意味しない。むしろ多くの場合、その終末は、より本来の、より高い自己への弁証法的発展という使命に忠実であるべく、苦しみ抜き悩み抜いて、現実的には、すなわち自己克服・諦念によって、結果として女性に対して不誠実たらざるを得なかったのである。

- (1) H. A., Band 1, Sprüche, S. 320.  
なぞ Frohnatur はゲーテの造語とされる。
- (2) H. A., Band 9, Dichtung u. Wahrheit, S. 32.  
ibid., S. 31 f.
- (3) ibid., S. 31 f.
- (4) ibid., S. 14.
- (5) 大畑末吉「ゲーテの市民性とその時代的背景」(日本独文学会「ドイツ文学特集、ゲーテ」昭和二十四年)五頁以下。
- (6) Wilhelm Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung, 1929, S. 223.  
ibid., S. 223 f.
- (7) ibid., S. 223 f.
- (8) ibid., S. 224.
- (9) 小野浩「ゲェテの世界観について」(ゲェテの古代的転回「昭和四五年」一九一頁。この論文は「世界観」の意味を詳細に吟味した異色の興味ある研究である。
- (10) 大畑末吉「ゲーテ哲学研究」昭和三九年。本書はゲーテの世界観の土台といえるスピノチスムスを取扱った好箇の研究である。
- (11) H. A., B. 13, Zur Farbenlehre, S. 324.
- (12) Georg Simmel: Goethe, 1921, S. 42.

- (3) H. A., B. 9, S. 283.
- (4) ゲーテの世界観の支柱をなす対極性 *Polarität*, 高昇 *Steigerung*, 諦念 *Entsagung* のうち本稿では諦念だけしか触れられなく。
- (5) H. A., B. 1, S. 86ff.
- (6) G. Simmel: a. a. O., Vorwort S. 6f.
- (7) W. Dilthey: a. a. O., S. 180.
- (8) 高坂正顕「ゲーテと教育」昭和四四年、七頁。
- (9) シェークスピアがゲーテに与えた影響は云うを俟たないが、ことに人間心理に関してシェークスピアから学んだところはきわめて大きかった。それがイロニーとも警句とも、とれる次のゲーテの言葉になっっている。  
「シェークスピアは才能の芽生えつつある人々にとっては読むことは危険である。彼は彼を模して作ることを彼等に強いる。しかも彼等は自分で創造してゐると妄想するのでも。」(H. A., B. 8, *Betrachtungen im Sinne der Wanderer*, S. 295).
- (10) H. A., B. 7, S. 151.
- (11) 小宮豊隆「ヴィルヘルム・マイステルの徒弟時代、解説」(岩波文庫「ヴィルヘルム・マイステルの徒弟時代」(下)昭和二八年)三〇二頁以下。
- (12) H. A., B. 9, S. 151.
- (13) W. Dilthey: a. a. O., S. 239 「ゲーテは他人<sup>た</sup>んごとを自分自身の生活に関係させることによってそれを理解し、かく理解されたものは彼自身の発展の契機になったのである。」
- (14) W. Dilthey, *ibid.*, S. 175.

ゲーテと教育——素描

- ② *ibid.*, S. 176.
- ③ H. A., B. 1: a. a. O., S. 29ff.
- ④ 成瀬無極もリスボンの惨禍の引続く報道がゲーテの宗教観の土台になったと見ている。(成瀬無極「疾風怒濤時代と現代独乙文学」昭和四年、一〇四頁)。
- ⑤ H. A., B. 1: a. a. O., S. 45ff.
- ⑥ 奥津教授のゲーテ文献中の F. Wittels: Goethe und Freud. (Die Psychoanalytische Bewegung II, 5) があり、あるところの点の研究かと推測される。
- ⑦ H. A., B. 6, Die Wahlverwandtschaften, S. 321. ⑧ H. A., B. 7, Wilhelm Meisters Lehrjahre, S. 229.
- ⑨ キムナ・ヴァンナは「全裸の上にマントを着し、わが陣へ来て、わが許に一泊するならば、包囲された彼女の都市をサの住民を救う」との提議に、その都市のあるじたる夫の反対を斥け、かねて彼女に思いを寄せていた敵将の許へ赴くのであり、ニューデットは結婚したが、処女のまま未亡人になった美女で、敵将に包囲された自分の都市を救うために、その貞操を犠牲にして、家来の反対を押切り、その代り隙を見て敵将を殺そうと単身敵地を訪れ、これを果たす。ただ彼女はその間、敵将の男らしさにひかれたり、女性のさがに心うすいて敵将に抱かれては、その愛撫に狂わしく我を忘れたのであり、殺した敵将の寝室からよろめき出て来て「ああ私が石女うそ女であればいいのこー」と叫ぶのである。
- ⑩ H. A., B. 1, Alers-Werke, S. 385.
- ⑪ G. Simmel: a. a. O., S. 193f.
- ⑫ H. A., B. 7, S. 235.
- ⑬ G. Simmel: a. a. O., S. 201f.
- ⑭ *ibid.*, S. 204.



コールマイエルはその著「教育州」の冒頭でいう。<sup>(1)</sup>「ゲーテの国民教育者 Volkserzieher としての人柄 Persönlichkeit に対する関心は、教育関係の領域においてさえ、あまり活発でも、また深くもない。これを証するためには一般に用いられている教育関係の教科書、辞典を指摘すれば足りる。ここでは若干の、それも多くはとるに足りない文章でゲーテを片付けているとし、その理由をレーマンがその優れた論文『ゲーテと教育問題』<sup>(2)</sup>の序言の中で説明している」としている。

すなわちレーマンは「シルレルおよびフィヒテに特徴的であるところの国民教育者たる衝動が、ゲーテには全く欠けている。ゲーテにおいては、その教育的な関心や、理念 Ideen はかかる衝動を土台として成長したのではなくて、むしろ芸術家 Künstler および人間として、子供の世界 Kinderwelt に対する直接的な関心から成長したのである。」<sup>(4)</sup>として、ゲーテの「若きウェルテルの悲しみ」の中の次の言葉を引用している。

「私の心情にとってこの地上で一ばん近いのは子供たちです。かれらを観察して行って、ごく小さなことがらの中にあらゆる美德 alle Tugende あらゆる力の萌芽を見るとき——いつかはかれらは切実にそれが必要になるのですが——、またかれらの強情さの中に、将来の確固不屈の性格を、かれらの気ままたさの中に、世界に出てその危険をくぐり抜けて行くユーモアと融通性を見抜くとき——しかもそれらすべてが少しも損なわれずに、全くそのままで——。私はいつもいつも人間の師キリストの金言『なんじらこれらの者の一人のごとくならずば！』を反復するのです。」<sup>(5)</sup>

ホルニツヒもいうように、ゲーテは子供の心情に対してきわめてせん細な理解を持っていて、その一生を通じて子供に対する深い愛に満たされていた。「詩と真実」の中でいっている。

「わたしたちの前を歩きまわる幼ない子供たちを、わたしたちは満足、というより感嘆の念で見ると見るとは、なぜならば、かれらは大抵が持っている以上のものを期待させるからである。(中略)子供がその未来を暗示しているとおりに成長して行くならば、まったく天才ばかりになるだろう。しかし成長ということは単なる発展 *Entwicklung* ではない。一人の人間を形成しているいろいろな有機的なシステムは、互に発生しあい、互に引継ぎあい、互に変化しあい、互に押しつけあい、さらに互に食いあいさえする。かくて幾つかの才能、幾つかの力の發揮は、しばらく経った時のあとでは、もはやほとんど跡形もなくなってしまう。」<sup>(7)</sup>

「私は自分より年下の人たちが私の周りに集って来て、私にたよってくれるのを見るのが好きで、それによってむろん結局はかれらの運命を背負い込んで煩らわしい目にあうのであった。」<sup>(8)</sup>

ここには愛情のこもった観察眼、無私で子供にむかう教育者本能ともいうべきものがうかがわれる。

現実においてもその生涯の間に、熱心に妹のコルネーリア、わが子のアウグスト、シタイン夫人の息子フリッツ、ワイマールのカルル・アウグスト公などの教育を引き受けたのである。ことにアウグスト公に対しては、これを王者として育て上げるために、自らへの風評をも意に介せず献身的な努力を払ったのであって、そのことは阿部次郎のユニークな論文「政治家としてのゲーテ」<sup>(9)</sup>に詳しいが、これらに関しては本稿では触れない。

晩年の作品、「ウィルヘルム・マイスター・徒弟時代」(以下、単に徒弟時代という)「はいわゆる教養小説 *Bildungsroman*」のちに呼ばれるもので、商人の子のウィルヘルムが、いわば徒弟修業に出て、自己という個人を形

成して行くプロセスを描いたものであり、そこに流れている理念はフムボルト的な一般教育 *allgemeine Bildung* であって、その最後で漸く、自分が父親であり、人間は自分だけに責任があるのでなく、自分の子に対しても責任があることを自覚するに至るのである。その後編となる「ウィルヘルム・マイスター 遍歴時代」(以下、単に遍歴時代という)は、一人前のマイスター *Meister* (親方、大家の意) になるための、いや親方になって行くプロセスを、そこにつきつきに展開される物語を通じて描き出したもので、その中ほどに描かれている「教育州 *die pädagogische Provinz*——教育機能集団の村の意」で、ウィルヘルムの子フェーリクスが教育される一方、作中に出て来るいろいろの人物を通して、ウィルヘルム自身が単なる個人の発展ではなく、むしろ集団の成員として、社会の一員として、実際的に有用な自己を形成して行くのである。徒弟時代の理念が倫理的・美的ヒューマニズムであったとすれば、後者は実践的、技術的ヒューマニズムともいえるものであり、したがって一般教育に取って代って職業教育 *Berufsbildung*<sup>40)</sup> が前面に出て来る。

このようにゲーテの考えていた教育は「遍歴時代」で一層明らかになるが、「遍歴時代」をつらぬいている二つの根本思想がある。それは仕事 *Tat* と諦念 *Entsagung* である。ゲーテが「ファウスト」<sup>42)</sup> の中で、主人公をしてヨハネ伝のはじめの言葉「はじめにロゴスありき」のロゴスの翻訳を、「意 *Sinn*」と訳して見、つきに「力 *Kraft*」と訳して不満だったが、ついに自信をもって「はじめに行為 *Tat* ありき」と訳させた意味は、すでに大方の知るところであろう。「遍歴時代」の教育州で生活している青年たちが合唱した詩の一節<sup>43)</sup>

仕事を愛して努力するのであれ！

お前の生命は仕事「*Tat*」であれ！

は、まさにこれに呼応する。しかもすでに合唱自体が示唆しているように、ここでの仕事とか活動は、単に自己個人にかかわるだけのものではない。父と子、個人と共同社会、という個と集団の認識の上に立つ仕事であった。作中、レナルドーに率いられて新世界のアメリカへ出発する場面で、レナルドーは演説する。

「しかし各個人は完全な明確さに到達することはできない。ところがわたしたちの結合 *Gesellschaft* では、各人がその度合いに応じて、その目的に応じて、啓発されることが、土台になっている。」「今やわたしたちは世界同盟 *Weltbund* に着手していると自認することが出来る。構想は全く大きくあり、実行は知性と能力によって容易である、統一 *Einheit*こそ全能である。それゆえ、わたしたちの間には何らの分裂も、抗争もないのである。わたしたちが守るどの原則も、わたしたち凡てにとつて共通である。——私ははっきりいう——人間は、外部的な関係を抜きにして、自分自身を考えることを学ぶべきである。人間は、環境の中から探し求めるのではなくて、自分自身の中から、首尾一貫したものを、探し求めるべきである。そうすれば人間はそれを発見するであろうし、愛情を以てそれを育成し、保持して行くであろう。そこで彼はどこに居ても自宅に居るような感じで、自己を形成し、ととのえてゆくであろう。」「しかし人間が何を把握し、何を処理しようとも、個人 *der Einzelne* では不十分であり、結合 *Gesellschaft*こそが、つねに勇敢な男子の最高の欲求である。有能な人々は、丁度、建築主が建築技師を求め、建築技師が左官や大工を求めるといったように、相互が相関

連し合うべきである。」

個人を全体と結合させるものは、共通の目的であり、この目的からいろいろな組織が作り出されるのである。<sup>65</sup>個人を価値深いものにするのは、この共通の目的のための作業 Arbeit に参加すること、すなわちその活動 Tätigkeit であり、その仕事 Leistung である。レナルドールはいう「わたしたちの仲間の中には、いかなる時でも自分の活動 Tätigkeit を、この目的に従って遂行出来ないような人は見当らない。」と。そしてこのような仕事 Leistung の価値こそが、人生における決定的な価値であることが、繰返し強調される。またいう「もし人間の所有する物に大きな価値があるならば、人間の活動 tun と仕事 leisten には、それ以上の価値を認めなければならぬ。<sup>66</sup>」。「人々はこのように言い、それを繰返して来た。『住みよいところこそ、わが祖国だ』と。しかしこの慰さめになる言葉も、『わたしが役に立つところこそ、わが祖国 Vaterland だ』といえ、さらによい表現になる。私をしていわしめれば『各人よ、いたるところで、自分のために、そして他人のために役立つようにつとめよ』である。これは教訓でもなければ、忠告でもなく、人生そのものの発言である。<sup>68</sup>」

レナルドールの口を藉りていっているこの言葉は、まさにゲーテが描いている教育の具体的な目標に他ならない。すなわち、仕事とは究極的には全体への奉仕でもある。

「諦念」は晩年のゲーテにとって中心的な思想になっており、それは「遍歴時代」の副題が「諦念する人々」とされていることからしても、明らかであろう。ゲーテの諦念とは一言にしていえば、限定と集中である。すなわち人間はその努力を限定して有限の範囲内で全力を集中すべきであることを意味する。それゆえ放棄といったような消極的な意味は全くなく、極めて積極的な意味を持ち、したがって、これが仕事、活動と矛盾なく結び付

くのである。「詩と眞実」の中でゲーテは説明する。<sup>99)</sup>

「わたしたちの、肉体的ならびに社会的な生活、風俗、習慣、世間智、哲学、宗教、いや、きわめて多くの偶然的な出来事、これら凡てがわたしたちに向つて、諦らめるべきである、と呼びかけて来る。内面的にきわめて固有なものとしてわたしたちが持っているものうちで、かなり多くのものを、わたしたちは外部に向つて持ち出してはならないとされる。また、わたしたちの本質を外部から補完するためにわたしたちが必要とするものが、わたしたちから取り上げられる。これに反して、わたしたちにとって、煩らわしくもあり、無縁でもあるものうち、そんなにも多くのことが、わたしたちに押しつけられる。骨を折って獲得したものや、好意を以てわたしたちに与えられたものをも、ひとびとはわたしたちから奪いと、そうとはつきり気が付かずにいるうちに、わたしたちは個性として、の自身、*Persönlichkeit* を棄てることを余儀なくされているのである、それも初めは時たまであるが、おわりにはとことんまで。(中略)

この困難な問題をしかし解決するためには、自然は人間に豊かな力、活動性、粘り強さを賦与した。その中でも特に気軽さ、*Leichtsin* が人間に、破滅しないようにと、助け舟になる。これによって人間はいかなる瞬間においても、もし次の瞬間に新しい仕事に手を着けることが出来れば、個々のことを諦めることが可能なのである。このようにしてわたしたちの全生涯を通じて、知らず知らずに、たえず自分を建て直してゆくのである。わたしたちは一つの情熱から他の情熱へ移ってゆく。仕事だ、趣味だ、道楽だ、十八番<sup>おはじ</sup>だと、あらゆることを試みつつける、そしてとどのつまりは『一切は空だ』と嘆く。(中略)ただ少数の人たちだけが、この最後の空しさの耐えがたさを予感して、あらゆる部分的な諦念を避けて、一度切りで全体的に諦念するのであ

る。」と。

すなわちゲーテの諦念は、阿部次郎の言葉を借りれば「それは退嬰無為のあきらめではない。それは仏典にいわれる不放棄によつて道を成ずることを、換言すれば人間の事業に対する集中を積極的要素とする。」「人力の限界を自覚し、自己の欲望を局限することを解し、叡智をもつて自己を集中し統御しつつ、ある特定の点において全体に奉仕すること——これこそ本當の事業である。」

この主題が陰に陽に作品を貫いているのであるが、ここではこれを具体的に例証することをせず、「遍歴時代」の中で純粹に教育の事象として描かれている「教育州」を取り上げることとする。

「教育州」<sup>22</sup>はウィルヘルムが友人に示唆されて、わが子フェーリクスの教育のため、そこへ入所させた生活協同体の学園である。広大な敷地で、そこに山地があり田畑があり牧場があり建物がある。将来の社会に役立つ新しい人間を教育して行くのが、この学園の本来の目的である。この学園で重要なことは、第一に個性に応じた教育、個性を伸ばす教育である。一面では集団としてのルールを固く守らせる一方で、可能な最大限の自主性を認めていることである。この点ではルソー的な自由教育理念が取り入れられている。第二には新人文主義的理念から人間能力の調和的、全般的発展を目指すフムボルト的な一般教養をでなく、職業教育を、しかも主として手工業のための専門教育を、個人の綿密な観察にもとづき明らかにされた適性に應じてほどこすことである。これは頭脳でなく、身体で、手でという勤労主義にもとづくもので、ペスタロッチと共通し、のちのケルシエンシタイン *Kerschstein* の労作学校 *Arbeitsschule* に、米国のデューイ *J. Dewey* の職業教育理念<sup>23</sup>につながるも

のである。第三は協同生活、連帯活動への教育である。少年は共同作業、共同生活を通じて分業社会における生き方を学ぶのであり、これはのちのドイツの教育運動の中で生きているのである。たとえばリーツ Hermann Lietz による田園教育塾 Landziehungsheim (一八九八年以来)や、田園学年 Landjahr がある。個別主義教育に対して、そのアンティテーゼとしての集団教育の意義がこの時も考えられていたといえよう。

手工業のほかに農業が必須であったが、それは「農耕こそは国民教育のもっとも一般的基礎」という思想が根柢にあったし、身体の訓練という健康上の目標もそこにあった。

しかし人間形成 Bildung の根本は宗教的修業を通じての畏敬 Ehrfurcht の念の涵養ということである。これは形式から、というか、知行一致というか、日常の生活、挨拶のうちで行われる。

ウィルヘルムは教育州を訪問し、そこで少年たちの不思議な挨拶の仕方を見た。最年少者たちは腕を胸の上に十字に組み合わせて晴れやかな顔で天を見上げた。中ぐらいの少年は腕を背中に廻して笑いを含んで目を地面へおとした。つぎに最年長の少年たちは一列に並んで直立し、腕を垂れ首を右に向けて監督者を迎えた。この畏敬をあらわす挨拶の三様の形式がすなわちここで行なわれている宗教的修業の三階梯を示しているのである。

ウィルヘルムがこの挨拶の意味をたづねたのに対し、監督者の一人は、畏敬の念だけは人間が生れてから後天的に、身につけてゆかなければならないものであるとして、次のように説明する。

「生れつきのよい、健康な子供たちは、多くのものを身につけています。自然は各人に各人が生涯の間、必要とするであろうものを、すべて与えてくれました。これを発展させるのが(教育者たる一筆者挿入)私どもの義務ですが、ときおり、そういうものがひとりにより良く発展することもあります。しかし、ただ一つの



ものだけは生れながらに持つてきている者は誰もおりません。しかもそれは、人間があらゆる方面にわたって、在るべき人間であるか否かのすべてがその一点にかかっているのです。それが畏敬です！」と。

すなわちこの挨拶は三つの畏敬を示すものであり、第一の畏敬は、より上のものに対する畏敬である。手を胸の上に十字に交叉して晴れやかに天上を見るのは、神が上にあつてそれが両親や師長の上に形をかりて現われている事を幼い少年の心に銘記せしめるためである。第二の畏敬は自分より下のものに対する畏敬である。手を背中に廻らし、いわば縛られた様な風にして、目をふせて微笑を含んで大地を見る事は、自分の住む大地の生活をじゅうぶんに見るべき事を教えるのである。そこは、自分の命を養うべき食を供給するところであり、限りない喜びを自分たちに与えるところであると同時に極度の悩みもまたそこから生れる。自分の肉体の上に与えられる自他の故意あるいは偶然の傷害、または自然界の異変から起る傷害に逢ったとき、深くこれを考えねばならない。人間の運命に起る一切の不幸、病患、死等はすべて自分たちの上に避け難い威力として臨むものであり、それは自分の高慢になる心をおし鎮め、謙虚にする力として現われるものである。第三の畏敬は自分と同等な者への畏敬であり、勇ましく直立の姿勢で立ち、両腕を垂れ頭右むねみぎをすることによって示される。人間相互の畏敬であり、個人が人類に対する畏敬であり、すなわち自分らはひとりの力を以てしては自分たちを襲ういろいろの障害、不幸に抵抗することは困難であり、協力してこれを克服するべき同胞の存在を認知し、これに信頼する畏敬の念であり、ひいては自然一般に対する畏敬でもある。

この三様の畏敬を総合した、いわば第四の畏敬ともいうべきものが、ゲーテの考える人間形成 *Bildung* の理想であるが、それは自己自身にたいする畏敬、最高の畏敬である。すなわち、

「この三つの畏敬から最高の畏敬、すなわち自己自身に対する畏敬が生れる。さらにこの畏敬からさきの三つの畏敬がさらにまた発展して行き、その結果、人間は人間が到達出来る最高のものに達し、人間は自分を神と自然が生み出した最良のものと考えることが許され、さらに高慢や我慾によって、また卑俗なものへと、引き戻されることなしに、この高所にとどまることが出来るのである。」

ウィルヘルムが畏敬について、現在でいえば心理学的立場から「偉大な自然現象やその他不可解な恐ろしい出来事に対する原始民族の恐怖の念が、何らかの尊い感情が、漸次にそれから生じて来るべき萌芽と、むかしから思われていたのでないでしょうか。」と質問したのに対し、監督者は「なるほど恐怖は自然に適している。自然は恐怖の念を誘い出すであろうが、畏敬は自然からは起らない。」と答え、そして三種の宗教の説明をする。それによれば第一は民族的宗教 *die ethnische Religion* (異教的 *die heidnische* とも) と呼ばれ、自分たちの上にあるものに対する畏敬にもとづくものであり、第二は哲学的 *philosophische* と呼ばれ、自分たちと同等のものに対する畏敬からのもの、第三はキリスト教的 *die christliche* と呼ばれ、自分たちの下にあるものに対する畏敬からのものであり、これは人類が到達し得たし、しなければならなかった究極のものである。

畏敬の教育はまた八角堂の周囲にある三つの画廊に展示されている宗教の歴史に関する絵が題材とされて行われ、その絵の内容の把握を通して、畏敬の意義、三種の宗教の意味が体得されていくのである。

ゲーテは畏敬をこのように考えた。すでに述べたように、畏敬だけは生れつきではなく「それは一つのより高い心情 *ein höherer Sinn* であって、人間の天性 *Natur* に加えられねばならぬもの」である。

畏敬とはそれでは一体何か。人間は対象を認知する能力を持っている。人間は孤立でなく、人間のなかで生れ、

育ち、生活するものであるから人間に対して、感情を、愛情を持ち得る。これはともに天性として持っている。

畏敬とは、それは対象を、無視するのではなく、認知することに初まる。それも対象が恐ろしく *furchbar* あるからではなく、未知である対象に対して、主体が細心 *furchsam* なのである。細心という心構えは、対象に対して用心することでもあるが、みずからを弱い、劣る、あるいは不完全であるとするへりくだりでもある。後者は謙遜<sup>00</sup>でもあり得る。謙遜 *Demut* は凡ての人間に天性ではない。

謙遜に、しかも愛情を以て、対象に、価値あることを予測して、価値を発見しようとし、発見することが、畏敬である。予測することも発見することも、ゲーテの世界観からすれば、みずからがその価値を持つときにのみ可能なはずである。かくて畏敬は対象を認知する、人間を尊重する、真理を探求する、美を発見する基本であると考えられる。かくてゲーテは畏敬を、彼の世界観の核心に、教育の核心に据えているのである。ここでひるがえって現代社会の風潮を考えると、あらためて、挨拶の意味、畏敬の意義が問い直されるべきことが示唆されているといえよう。

### あとがき

紙数の関係から執筆の途中でカットしたり、簡単化したりして不出来のものになったことをお詫びする。

どうしても書きたくて、書けなくて残念なのは、ゲーテの女子教育に関する吟味であった。多くのゲーテ研究ではこれには触れておらず、ごくわずかなものが、「ゲーテの女子教育についての資料になるものは殆んどない」といった註釈をつけているだけである。ゲーテが妹を含めて女子の教育のことを考えていなかったとは想像出来

ない。むしろ女性に関しては、恋愛とともに——彼の作品の中心人物としての女性は別としても——箴言その他でいろいろと発言している。ゲーテの時代には彼を含めて、女性は3 K (3 C) すなわち教会 Kirche、育児 Kind、料理 Koch がその役割であるとしていたことは予想出来る。しかし男子に対して「教育州」という集団教育を構想しているのに対して、女子についてはどう考えたかは、答えがプラスに出るにしても、マイナスに出るにしても明らかにしたいことであった。

「親和力」の中でオッティリーの女子学校がその教師を含めて描かれているが、これは女子教育についての考えを表明したものではない。それに当時ヨーロッパにおいては公立学校が出来初めているが、一般のこれに対する期待があまり大きくなかったとは予想出来る。ゲーテの父も公立学校に不信であったし、ミルも学校へ行く代り、父から個人教授を受けたのであった。この辺のところが解明されるべきことの一つ。もう一つはゲーテにあっては、女性は結局、理想に描く対象、したがってまた恋愛の対象、ファウストの最後の言葉<sup>89</sup>

永遠なる女性は

われらを引きて昇らしむ

Das Ewig-Weibliche

Zieht uns hinan.

であったのかの吟味である。

そのことの解明が逆にペスタロッチ派の教育施設とゲーテの教育州の関係の検討で、後者がユートピアであったか、またはゲーテの教育的見解を表明するだけの舞台だったか、それ以上であったかを明らかにする一つの手

がかりにならぬと考へられるからである。

(1) Otto Kohlmeier: Die pädagogische Provinz in Wilhelm Meisters Wanderjahren, 1922, S. 1.

(2) 一般に使用されて来つゝる教育学辞典や刊行年代順にあつたは次の通りである。

a) W. Rein: Encyclopädisches Handbuch der Pädagogik, 1896, B. 2, S. 887→898.

b) Ernst M. Roloff: Lexikon der Pädagogik, 1913, B. 2, S. 437→445.

c) Das deutsche Institut für Wissenschaftliche Pädagogik: Lexikon der Pädagogik, 1930, B. 2, S. 472ff.

d) Hermann Schwartz: Pädagogisches Lexikon, 1931, B. 4, als Nachträge, S. 1329→1342.

e) W. Hehlmann: Wörterbuch der Pädagogik, 1931, 1967 (8. neue Auflage), S. 204.

f) Hans-Hermann Grothoff u. Martin Stallmann: Pädagogisches Lexikon, 1961.

g) W. Horney, Johann P. Ruppert, W. Schulze: Pädagogisches Lexikon, 1970, B. 1, S. 1119→1124.

h) Christoph Wulf: Wörterbuch der Erziehung, 1974.

右のうち、a)のラインのもの以外は一頁の左右につけた番号であるから、頁数としてはその数の半分になる。

たしかにレーマンの云うように、f)では本文の見出しの項目にはゲーテの名前がなく、付録の「教育学の歴史」の中で、古典的理想主義的時代における人文主義理念の人々の一人として、フムボルト、シルレル、ヘルテルとともに記述されているにすぎず、本文では「教育州」だけが、その後のドイツにおける寮制教育(例えば田園教育塾 Land-erziehungsheim)との関係で説明されているだけのものもある一方、g)におけるエルツヘル H.M. Elzer のよかに、教育学におけるゲーテの意義は三つありとし、第一に新しい社会、変転して行く文化の中での人間形成の理念を示していること、第二にあらゆる教育的努力の目的をゲーテのいわゆる人間形成 Bildung に見出したところの、その後のドイツの教育運動の発展に寄与したこと、第三に上記のような人間の教育 Erziehung と形成 Bildung に

ゲーテと教育——素描

関する作品、文献の価値であるとしていえるようなものもあり、一概に軽視されたいとも云えないが、ゲーテの教育のみを取扱った著作が数種しか存在しないことは事実である。

- (3) Rudolf Lehmann: Goethe und das Problem der Erziehung (Jahrbuch der Goethe-Gesellschaft, 1917, B. 4, S. 42)

(4) レーマンは他の個所でもこのウェルテルの同じ言葉を引用して、ルソーと比較しながら、ゲーテの子供に対する愛情を語り、ゲーテの「私は人の顔を見ると、すぐその人が好きになるのです」という言葉は、ゲーテの子供たちに対する関係に「はんだま」と述べている。

R. Lehmann: Die Deutschen Klassiker als Erzieher, Herder-Schiller-Goethe, 1921, S. 243f.

- (5) H. A., B. 6, Die Leiden des Jungen Werther, S. 30.

- (6) R. Hornich: Goethe als Erzieher (E. M. Roloff: Lexikon der Pädagogik, 1913, B. 2, S. 437ff)

- (7) H. A., B. 9, S. 71f.

- (8) *ibid.*, S. 503.

- (9) 阿部次郎「政治家としてのゲーテ」(阿部次郎全集、第二三巻、昭和三七年、四六頁以下)。

- (10) 登張正実「ドイツ教養小説の成立」昭和三九年、三頁以下。

本書は「徒弟時代」を主題との関係で取扱った重厚な、すぐれた研究であるが、そこでもいわれているように、諸説があつて簡単ではないが、一応は Paideia = Bildung すなわちギリシャの一般教養を根柢にして、人間形成を念頭にしてつくられた小説といふことが出来よう。

- (11) *Berufsbildung* とは *beruf* の前の *allgemeine Bildung* と対応する教育学上の用語であるが、ゲーテが考え、ゲーテが口にしていゝる *Bildung* と混同してゐることが必要である。*Bildung* とは文字が示すように *Bild* から由来して

いるが、最初は外部から手を加えて手本に模してつくられた形 Form を意味したが、ウィーラント、ヘルデル、ゲーテによって、外部的な形成 Formung を超えた個人的、individuell な一人の人格 Person の形成 Gestaltung の表現になったのである。

その後これが教育学の領域で用いられ、多義を産むに至っている。したがって職業教育、一般教育と云う場合の Bildung とは(の)教育 Erziehung (広義)と同義語として、(および)教育 Erziehung (知的教育)の上位概念として使われつつあると見るべきである。

- ⑤ G. Witkowski: Goethe, Faust, 6. Auflage, S. 34, Z. 1237.
- ⑥ H. A., B. 8, Wilhelm Meisters Wanderjahre, S. 317.
- ⑦ ibid., S. 390f.
- ⑧ R. Lehmann: Die Deutschen Klassiker, S. 309.
- ⑨ H. A., B. 8, S. 391.
- ⑩ ibid., S. 385.
- ⑪ ibid., S. 386.
- ⑫ H. A., B. 10, Dichtung u. Wahrheit, S. 77f.
- ⑬ R. Lehmann: a. a. O., S. 238.
- ⑭ 阿部次郎「ウィルヘルム・マイスター遍歴時代、解説」(阿部次郎全集、第四卷、三〇九頁)。
- ⑮ 教育州とペスタロッチ、およびその弟子フェレンベルクの教育施設との関係は、一九一〇年になって明らかになってくるが、ここには紙数の関係で、その関係文献をあげるにとどめる。
  - a) Karl Muthesius: Goethe u. Pestalozzi, 1908.

ゲーテと教育——素描

b) R. Lehmann : Die Deutschen Klassiker, 1920.

c) Otto Kohlmeier : Die Pädagogische Provinz, 1922.

○)がこの事について最も明確、詳細に考証している。

ゲーテが前記の教育施設を知っていたことは明らかにしたが、もともとペスタロッチ個人を高く評価していなかったし、本文で述べたように、ゲーテは凡て自分の体験で濾過して自分のものにしてから表現するのであり、ウィーラントの「フーガトン物語」と「マイスター」もそうであるし、「野ばら Heidenröslein」<sup>※</sup>も国民詩として、美しいバラには棘があつて刺されると云うモティーフの伝承されたものを、ゲーテがフリデリケとの恋愛の体験から、折られたバラの悲しみというように、モティーフも逆にするとともに、あの独創的ひびきを持つレフレインを付したのである。(※ E. Wolff : Der junge Goethe, 1907, S. 430→442)

㉔ John Dewey : Democracy and Education, 1916, S. 357.

㉕ H. B. B. 8 : a. a. O., S. 149f.

㉖ ibid., S. 154.

㉗ ibid., S. 155.

㉘ ibid., S. 157.

㉙ ibid., S. 156.

㉚ ibid., S. 156.

畏敬の念の段階と、宗教の段階が相異しているのは、前者は個人の生涯の發展を段階的に見た時のものであり、後者は西洋精神史における生起の順序によるものであることを、奥津教授は畏敬の説明のところで明らかにしている。

(奥津彦重「前掲書」一四七頁以下)



- ③ E. Merker : Ehrfurcht, (Jul. Zeitler : Goethe-Handbuch, B. 1) S. 460.
- ④ H. A., B. 9, S. 32. 「當時の学校教師を信用してゐなかつたのだ」  
ibid., S. 119. 「公立の学校授業に対する不信は日を追つて募つてゐた」
- ⑤ 朱牟田夏雄訳「ミル自伝」(岩波文庫)。
- ⑥ Wilkowski : Goethe, Faust, a. a. O., S. 316.
- ⑦ 左翼のイデオロギーに立つ側からのゲーテ批評は当然予想されることでもあるし、古い翻訳しか手に入らなかつたので、それを文献のところに捺印をつけてかかげるだけににとどめる。ただケオルク・ルカッチは「ゲーテの世界観」の中で、ゲーテの「経験と詩作」「特殊と普遍」をふまえて高い評価をしている(ゲーテ批判所載)。

参考文献(本文の註以外のもの)

- Goethes Werke, Hamburger Ausgabe, 15 Bände, 1962.
- Jul. Zeitler : Goethe-Handbuch, 3 Bände, 1918.
- Paul Fischer : Goethe Wortschatz, 1929.
- Die Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin : Goethe Wörterbuch, B. 1, 1969.
- Wilhelm Bode : Goethe in vertraulichen Briefen seiner Zeitgenossen, 1921.
- Eugen Wolff : Goethe-Kritik, 1925.
- 小川政修「自然科学者としてのゲーテ」大正五年
- 中山昌樹「詩聖ゲーテ」大正九年
- 森林太郎「ファウスト考」(鷗外全集第一一巻)大正一二年

ゲーテと教育——素描

青木昌吉「ゲーテとクライスト」大正一四年

「ゲーテとロシア文学」（早大欧州文学研究会「ゲーテ研究、百年祭記念」昭和七年

ワルター・ドーナート「ゲーテの精神」（東大独文学会「独乙文学研究」昭和八年

橋本文夫訳「ジーベック、ゲーテの世界観」昭和九年

※大塚金之助他訳「ゲーテ批判」昭和一〇年

岩崎喜一訳「ゲーテと教育 O. Auriac: Goethe et l' éducation」（教育学研究、昭和一二年四月号）訳に難があるが、  
仏人の論文という意味であげる。

木村謹治「若きゲーテ研究」昭和一二年

木村謹治「ゲーテ」昭和一三年

木村謹治「ファウスト研究」昭和一四年

渡辺格司訳「ゲーテ評伝ビルショウスキー」上、昭和一八年

渡辺格司訳「ゲーテ評伝」下一、昭和二〇年

渡辺格司訳「ゲーテ評伝」下二、昭和二一年

木村謹治「マイスター研究序説」昭和二三年

小牧健夫編「季刊ゲーテ第一集」昭和二三年

富野敬邦「ゲーテの教育村」昭和二三年

中野聰一「ゲーテの教育思想」昭和二四年

※黒田辰男「ソ連に於けるゲーテ研究」（日本独文学会「ゲーテ」昭和二四年）

大畑末吉「ゲーテ」（二橋論叢、昭和三六年四月号）

- 徳沢得二「ゲーテ、ファウスト考」昭和四三年
- 上野宗男「ゲーテの教育愛」昭和四四年
- 大野俊一他「ビーターマン、ゲーテ対話録」全五巻、昭和四五年
- 小栗浩「西東詩集研究——その愛を中心として——」昭和四七年
- Fr. Regener : Skizzen zur Geschichte der Pädagogik, 1912.
- Paul Barth : Die Geschichte der Erziehung, 1925.
- Richard Müller-Freienfels : Bildungs- und Erziehungsgeschichte, 1932.
- Joseph Götzler : Geschichte der Pädagogik, 1935.
- 文部省調査部「女子教育の沿革及び現状」(内外教育制度の調査、第六輯)昭和一〇年
- 文部省調査局「各国の高等教育、I、アメリカ合衆国」昭和三二年
- 文部省調査局「各国の高等教育、II、イギリス」昭和三三年
- 文部省調査局「各国の高等教育、III、フランス、ドイツ連邦共和国」昭和三三年
- 近藤恒一訳「エウジュニオ・ガレン、ヨーロッパの教育」昭和四八年
- 講談社「世界教育史大系、初等教育史」昭和五〇年